

人間科学部こども学科公開講演会・シンポジウム 「どちらになりたい？小学校の先生・幼稚園の先生」

Open Lectures and Symposium in 2009 by the Department of Child Science, the Faculty of Human Sciences
Which is your future career, an elementary school teacher or a kindergarten teacher?

馬場 治 抄録
Summarized by Hajimu Baba

〈講演風景〉



日時：平成21年10月3日(土) 13:00～16:30
会場：金沢星稜大学 本館101講義室

〈プログラム〉

- I部【基調講演】挨拶：宮崎正史（金沢星稜大学人間科学部長）
「教師という仕事のすばらしさ—その中身・こどもの発たち特性—」
講師：小川博久 先生（聖徳大学教授：前日本保育学会会長・野外文化教育学会会長・東京学芸大学名誉教授）
講師：諸岡康哉 先生（金沢大学教授：日本教育方法学会理事・金沢大学附属中学校長・元同付属幼稚園長）
- II部【シンポジウム・指定討論】
幼稚園の視点から：松本陽子（金沢星稜大学人間科学部こども学科教職委員）
小学校の視点から：村井万寿夫（金沢星稜大学人間科学部こども学科教職委員）
子育てスペシャリストの視点から：岡部昌樹（金沢星稜大学人間科学部こども学科教職委員）

I部【基調講演】

福原

皆さん、こんにちは。本日は、大変有名な先生お二人をお招きしました。本来は受験生の高校生さんたちにたくさんおいでいただく予定でしたが、ばらりとお顔が見えます。大変勉強になるわけですので、私どもの学生たちもたくさん揃っているようですが、まずは、この会のご挨拶を私ども金沢星稜大学人間科学部の学部長を務める、宮崎正史からご挨拶申し上げます。

宮崎

お休みのところ、参加いただいて有り難うございます。

人間科学部長をしております宮崎正史と申します。本日は「どちらになりたい？小学校の先生・幼稚園の先生」というテーマで著名な先生お二人をお招きして、講演会とその後、シンポジウムを企画しております。金沢星稜大学に人間の限らない可能性を探求する人間科学部ができて三年を経たところではありますが、人間科学部こども学科ですね、その「こども学科」の名称でお気づきになりましたでしょうか、「こども」というその名称は、平仮名で「こ・ど・も」と我々書いております。これには実は理由がございます。このこども学科という所では、この履修課程の中で幼稚園の教諭免許一種、小学校の教諭免許一種をとともに取得できるカリキュラムになっております。

しかし、この時に幼稚園の先生になるか、あるいは小学校の先生になるか、その学校に関わることを学ばばいいかという決めてそうではありません。小学校の先生になるためには、その前の幼稚園あるいは保育園で、どのような発達特性をもった子供たちがどのような体系の教育で学んでいくかをしっかり学ぶということ、そしてそういった特性をもった子供たちと接触する、そういう子どもと一緒に体験をすることにより初めて小学校の教育というもののあるあり方の位置づけができます。

これは幼稚園の先生を目指す場合でも全く同じことが言えます。そのような観点から私たちはゼロ歳から思春期に至る、その人間が精神的にも肉体的にも一番著しく発達する時期を、我々は「こども」というように位置づけて、そのような観点からこども学科を作り、またカリキュラムを運営しています。現在その「こども学科」で3年になる学生諸君は将来、小学校の先生を夢見て、幼稚園の先生を夢見て今、一所懸命に学んでいるところです。

その学びの課程の中では、文部科学省が定めたそれぞれの教育の指導要領、あるいは保育要領というものを理解しておく必要があります。この2009年度に小学校の指導要領また幼稚園の指導要領が大幅に改訂され、特に小学校の指導要領については、ある地域で先行実施されるというところまできております。

その教育要領の改訂とはどういった内容のものであるか、あるいはまた、幼稚園の教育要領はどういう箇所が変わったのかということ踏まえた上で、いま我々と集まっている学生諸君、聞きに来られた高校生の皆さん、そしてまた、教育の現場、幼稚園で、小学校で教えていらっしゃる先生方、皆さんと共に教育のあり方、また教師となることの素晴らしさを今日の講演会、シンポジウムで実感したいと思います。

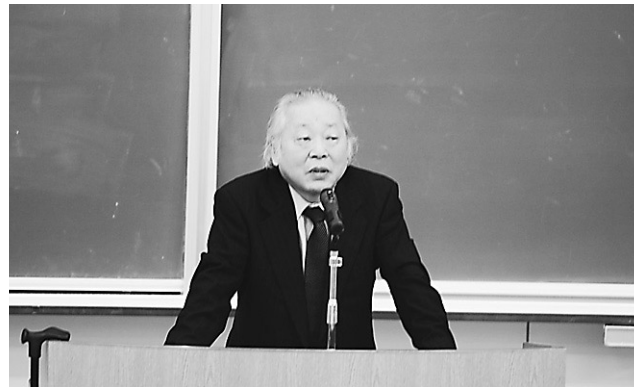
講演会では、前にお二人の先生がお座りになっておられます。まず、子供の発達特性の観点から、小川博久先生に語っていただきます。学芸大学の名誉教授、現在、聖徳大学教授でいらっしゃいます。そして、最近まで日本保育学会の会長も務めていらっしゃいました。次に、地元ではお馴染みですが、金沢大学の社会教育学類の教授でいらっしゃいます諸岡康哉先生に教師・児童・学級という観点から語っていただきます。お話しの中から教師という仕事の素晴らしさについて共に学びたいと思います。

第Ⅱ部は、本学の幼稚園教育の専門家、小学校教育の専門家、そして先ほど申しあげました長いタイムスパンで子供を捉える子育てスペシャリストという三人も加わり、各先生方の視点からのシンポジウムを予定しています。

以上、本日の会に関して簡単ですが、ご挨拶をさせていただきます。有り難うございました。

福原

有り難うございました。私、申し遅れましたけれども、人間科学部こども学科所属の福原昌恵です。主に幼児教育を極めようとする学生さんたちを叱咤激励したいという考えでおります。さっそく本題に入っていたらと思いますが、表題に小学校の先生・幼稚園の先生と書いていますが、順番といたしましては、発達の順位を尊重いたしまして、幼児の子供の方から、小川博久先生にお話ただこうと思います。小川先生は本年の5月までは保育学会会長でいらっしゃいました。それで多少、お時間がおできになったので、本日こちらにお招きしたわけです。それでは、よろしく願いいたします。



小川

こんにちは。幼児教育の世界に入ってもう30年、いや、もっと経ちますかね、40年近いのですけれども、私が今皆さんに自慢できることは、幼稚園や保育所に通った回数がどの先生よりも一番多いのではないかと思います。

事実、幼稚園に出掛け子供の姿を見て追っかけることが、私にとっては無上の喜びであります。例えば、幼稚園へ行って、子供たちが名札を付けていない場合は上履きの表面に名前が書いてあります。例えば「ダイスケ」という名前が書いてあって、そういう時、私から子供の所へ歩み寄り、「君、ダイスケ君だよな」と言ったりすると、子供はびっくりして「え、なんで僕の名前知ってるの?」というふうに不思議がります。で、この名前を呼ばれるということは子供にとってみれば、大変大きな意味があります。なぜなら、名前を知っているというのは、子供にとっては普通、自分のお母さんとかお父さんとか近所の人しかいないからです。それが自分の名前を呼んでくれたものですから、この人はよっぽど私のことをよく知っている、私と深いつながりのある人だと子供は思ってしまう。「えっ、どうして知ってるの?」というのは、自分が生まれた時に名前を付けてくれるのはお父さんか、お母さんですから、その次にこの人は僕のことを深く知ってるんだということで、子供の固有名詞を呼ぶことは、子供にとっては、僕と特定の関係にある人なんだと思込む機会になります。

ですから、そういう点では、もし私が悪い人だったら、誘拐される可能性もあるのですね。そういう意味で、固有名詞で呼ばれるということが子供にとって、僕はこの人と特定の関係だということになるので、幼稚園の先生になった時には、必ずこの学校の方から子供の名前を一人一人、しっかり覚えるのですよと言われて、担任になった時には、必ず子供の顔と名前が一致するように覚えるというのは、新卒の、あるいは実習生の義務になっています。

なぜそうなのかというと、子供がそのことだけで、名前を呼んでくれるだけで子供はその先生を信用し、その人は僕にとって信頼できる人なんだというふうなるからですね。子供が思い込むというのは、そういうことなのです。

それでは一体なぜこういう仕組みがあるのでしょうか。実はですね、私は子供のことをずっと調べてきて、子供にとって、知らない幼稚園に入るということは、大変な冒険なのだということが分かりました。家庭にいる時は、お父さんやお母さんと親しい関係にあります。これは乳幼児の発達を見ているとはっきりしているのですが、この親子の関係というのは見えない形で応答関係をやりとりしていることを最近、世界の小児科学会でエジンバラ工科大学の先生が「見えないコミュニケーションを親と子はやっているのだよ」という研究を「ミュージカル・コミュニケーション」という形式で発表されました。私はテレビでその話を聞いてはっとしたのです。一体どういう形で親子はこういうコミュニケーションをやっているかという、例えば、子供は寝る時に必ず、お母さんの心臓の方に抱かれますね。そうするとお母さんの心臓の鼓動は「どっ、どっ」と脈打つ。それに対して子供は「どっどっ」と二対一、二拍目のところでお母さんと子供の心臓の鼓動がシンクロします。同期してくるわけです。このことはどういう意味があるかという、私の友人、かつての同僚が、私の子供が生まれた時にカナダからテープを送ってくれました。それは何かというと、心臓の鼓動が「どっどっ」と脈打つお母さんの鼓動のテープでした。「これを家へ行って、あなたのお子さんの所でテープをかけてごらん」と言われ、それをかけますと「どっどっ」と音がする。それを聞いていると子供は自然に眠ってしまいます。つまり、お母さんの鼓動と子供の鼓動が同期することにより、子供はリズムが合ってくるとそこで睡眠状態に入り、寝てしまうわけです。こんな具合に、この親子は目には見えないやりとりをしている。

このやりとりは、既に胎児の段階から行われています。例えば、紙おむつがない時代にバス停の所で見たのですが、子供が泣いている時におむつを取り替えるお母さんがいました。たいていは、おむつを取り替える時に、黙ってやるお母さんはいなくて、泣いている子供に向かって「ごめんね、いま取り替えるから待っていてね。ほら、すぐに

気持ち良くなるからね」と語りかけながら取り替え、替え終えてからも「ほら、気持ち良くなったね、良かったね」と思わず声をかける。その時、子供はお母さんの口の動きを見ている。口の動きが止まった瞬間に子供は喜びの感情を示す。全身で反応する。これは「あなた」「私」というコミュニケーションがあるんだよということを、発達心理学者の岡本夏木さんが指摘されています。このやりとりがあるから、子供はお母さんの言うことを聞いて、それに対して感情を示し、反応するわけです。こういうやりとりをずっと母子関係で行っている。これは、目に見えない形で親子の間であって、たとえ音声を伴う会話がなくても、親子の間にはそういうつながりがあると私は思っています。例えば、子供が学校へ行って具合が悪くて、あるいはいじめられたりして帰って来た時に、たいてい子供に愛情を持っているお母さんならば、「あっ、どうしたの、何かあったの、ちょっとおかしいよね、あ、熱がある」というふう子供に異常に気づく。なぜ気づくのか。おそらく見えないコミュニケーションをやっている、そうすると子供がいつもと違う状態だ、ちょっと乱れていることに気づく。「変だよ、熱がある」。こういう感覚は、母子関係で見えないやりとりをやっているからだ、というふうにも考えてもいいのではないのでしょうか。それは、親しい人間同士の間では、そういう見えないリズムで応答している。例えば、私が家庭にいて「ちょっとそのティッシュを取ってくれないかな」と思っていると、女房がすっとティッシュを持ってくる。見えないコミュニケーション、別にのろけているわけではないのですけれども、以心伝心のようなコミュニケーションがあります。普通はこういう関係があって、おそらく諸岡先生が帰ると奥様が「あっ、あれは主人の靴音だ」と分かる、というような一種のミュージカル・コミュニケーション、そういう子供たちと親しい間柄では必ず応答関係があって、「何か言いたいの」という反応がある。

ところが、幼稚園や保育園に初めて行った時の子供というのは、全然そういうことがない人たちばかりです。全く知らない雑踏の中に子供は入っていく。そういう時に担任の先生が「あっ、君、ダイスケ君」と声をかける。これは本当に自分の親しい人が現れたという形で、お母さんに代わる人が現れたと思えば、その人と親しくなる。子供はその時に保育者を信用する。こういう意味で「担任の先生は子供の名前をしっかりと覚えてね」となるわけです。

従って、固有名詞で子供の名前を呼ぶことは大変意味のあることなんだと、私は先生方にお伝えしています。ですから、普通は幼稚園の場合ですと、子供は毎日登園してくる時に、門の入り口の辺で鈴なりになって、「先生おはよう、先生おはよう」って誰でも言いたがる。それはなぜかということ、こういう「あなた、私、あなた、私」というや

りとりをもう先生との間に確立しているなら、必ず「先生おはよう」と挨拶したくなる。つまり、応答関係を先生ととりたくなる。こういう場所が幼稚園なのですね。ですから、子供は最も親しい応答関係を確立した人と必ずその応答する喜びを期待して園にやって来る。「おはよう」と、だから本来であれば、幼稚園になんとなく面白くないなという顔をして来るとか、幼稚園に来るのがつまらなそうにしているというお子さんは、やはりどちらかに、幼稚園と園児との間にそういう関係が確立していない。

私を知っている幼稚園だと、必ず子供は、「わーっ」と来て登園すると待っている先生に「おはよう」と言います。それは自分と応答関係のある先生とこういうやりとりをしたいという欲求からです。人間は一人では生きられなくて、本当に親しい人と応答関係を確立するということが、私はとても大事なコミュニケーションの出発点だと思います。ですから、私は幼稚園の先生に、「子供にお話をする時に、子供に話しかける時に、絶対ばーっと喋りまくらないで」と言っています。

例えば、私はいま前の方を見えています。ご迷惑かもしれませんが、見えていますと必ず瞬きをします。瞬かない人はいない。これはですね、私は応答する、向こうが答えだと思っている。相手の瞬きがあった瞬間にこちらは「あのね」と話し出します。つまり、子供と話をする時にどこの誰と話す場合でも、子供に対して応答系を想定する。相手の瞬きを確認してから「あのね」とお話しようとする。そのリズムがあると子供はちゃんと応答して、答えてくれる。ということが、一番最初に幼稚園に入った時にあなたたちのすることですよ、とお話している。

ところがですね、皆さんが実習に行った時は、子供がですね、皆さん保育園で実習に行った時には、やらなければならないと意識しすぎ、硬直してしまいます。「幼稚園に行って遊んできていいよ」と言うと、皆、本当に楽しく遊んでいますが、実習に入った途端、皆さんの態度が固まっちゃうんです。そういう場合、我々がいつも考えなきゃいけないのは、応答系の確立ということなのですね。そのところが保育の現場ではやはり難しく、子供が一人じゃないのです。相手が一人だったら、その人だけと応答すればいい。ところが、子供は「ダイスケ君」と呼ぶと、ダイスケ君は「僕の先生」だと思う。「サユリちゃん」と呼ぶと、サユリちゃんはサユリちゃん「私の先生」だと思う。他の子供たちはどう思っているかということ、「先生、僕の方を見て、僕の方を見て、僕とお話しして」とクラスの30人が全員思っている。

ところが、保育者は現場では30人と同時にはアイ・コンタクトができない。すると、保育者は台詞が変わってしまう。どう変わるかということ「皆さん」となる。「みんな元気？」

「みんな集まって！」となる。「みんな」ですから、「僕じゃないよね」と思っちゃう。いいですか、「僕」じゃありません。「先生、僕の方を見て」と思っているのに、「みんな」になっちゃうと、一人一人を見なくなる。

「みんな」という意味の認識不足で、私は大学の時に失敗した苦い経験があります。こっちに男子学生がいます。こっちに女子学生がいます。私の眼の球はどう動くか分かりますか。私は皆に目を配らなきゃと思い、まず男子の方に目を配ります。ところが、私は男子より女子の方が好きですから、目線はこうなります。これが女性の場合でしたら逆ですけども、皆になると私の目線は一点に留まらなくなる。「サユリちゃん」「ダイスケ君」と一人一人に目が向かなくなる。固有名詞で「サユリちゃん」と呼んだ時にはたいてい、アイ・コンタクトをするんだけど、相手が30人となると目線はこういうふうに動きます。これを新幹線にたとえると、「こだま」はいつべんに「のぞみ」になっちゃうから、新富士とか三島には停まらなくなると私は言っています。そうすると、子供は「先生、僕のことを見て」と願っているけれども、「先生は、僕の方を見てくれないや」と思うようになる。やはり、30人の子供に一人で同時に目線を配るのは無理なことなのです。

しかし、幼児教育では「一人一人を大事にしてください」と言っている。30人いつべんに大事になんてできない。カウンセリングじゃないんだから。

ここに担任の先生になった時の最初の困難があります。子供と一対一でアイ・コンタクトはとれないわけです。子供も、どうしてとってくれないんだろうと思う。そうなった時に、幼稚園の先生はこういうことをしなきゃいけないかということ、皆とアイ・コンタクトがあったように振る舞わざるを得ないわけです。これは小学校も幼稚園の先生も子供が大好きなのだけれど、最初に通過しなきゃいけない第一の難関です。その時にいくつかの手立てを講じる。

私は、そういう時に手遊びが大事だよと言っています。手遊びというのは、皆とリズムが合うから皆が先生の方を見る。子供も皆と先生の動きが合ってくれば、アイ・コンタクトがなくても、心は通ずるわけです。それが一つ。

もう一つは、子供の写真30人全部の写真をノートに貼りましょう。30人の名前を書いて写真を貼るのです。貼っておいて、今日一日、保育が終わったら上から見ていく。

「サユリちゃん」と目が合ったかな、「ダイスケ君」と合ったかな、誰と合ったかなと。一人一人を点検していくと、この子と合ってなかったという子供が必ずいます。あの子の方を見ていない。あの子と表情が合っていないという子供がいるの。では、どうしたらいいか。次の日、登園時に、子供がやって来た時に「おはよう。アユミちゃん、今日は何すんのかな」と昨日、目線が合わなかった子にはち

ちゃんとそこでアイ・コンタクトをする。そうすると、その子は先生とのつながりが切れてないと安心する。それが二つ目の手立て。

もう一つある。子供が集まった時に幼児というのは、実に自己表現をしたがる。先生に近いと思う子供は先生の傍らに自然に集まる。先生に遠いなという子供は後ろとか、周辺に集まる。こういう時に必ず先生は「みんな集まったかな」と全体に尋ねた後、周辺に「ダイスケ君いるかな」と尋ね、「あっ、マサオ君もいたね」と端にも声をかける。皆が集まった時に必ず周辺に集まっている子供の固有名詞を呼んで、そこで名前を呼んでアイ・コンタクトをする。すると、真中の子たちは先生と親しいと思っているから、先生とつながっている。周辺の子は呼ぶからつながるでしょ。そういう方法を採用。これが、三つ目の手立て。

幼稚園という所は、小学校もそうですけれども、大人一人に対して子供が複数の関係です。つまり、一人対集団の関係においては事実上、一人一人の子供と同時に目線を交わすことはできない。ところが、幼児教育では一人一人が大事だと言っている。どうしたらそのことを実現できるかという、先の手立ての他にもう一つは、お帰りの挨拶の時に「さよなら」と子供と目線を交わすこと。まだある。例えば、子供のエピソードを取り上げる。「カズオ君ちはさあ、赤ちゃん生まれたんだってねえ。へえ、かわいいでしょね」というような話を担任の先生がエピソードとしてすることがあります。また、小学校の先生は、「皆さん、カズオ君の家では、妹さんができたんだよ」というようなことをスピーカーみたいに言います。私は、それも良い方法だけれど、もっと大事なものは、そばに行って、この辺で喋る。これだけで、20人～30人だったら15日はかかる。でも、そうやっている、「先生と僕は赤い糸でつながっているな」という関係を作ることができる。このことを特に要求されているのが幼稚園の先生です。もし幼稚園で私に言われていることを実践したら、子供は先生のことをとっても頼りにするし、先生をとっても大好きになります。これは請け合い。たいてい、それをやらないから駄目なんだ。そうすると必ず糸がつながる。

昨今、保育者は「言葉がけが大切です」と言っている。私は反対です。目で保育しなさい。特に、遠くにいる子供に遠目で合図する。これは、私が相手を把握するというよりも、子供が先生に認知されているということが伝わる。先生は僕のことを忘れていないということが。そのことを子供にメッセージとして送るために、遠くの方を見たら「いたいた」というふうに首を長く伸ばして「いたね」。これで子供に認知される。私が今、なぜこのことを言っているのかというと、最近、東京の先生から聞いた話なのですけれども、「先生、私の名前を覚えてくれてたんだ」と四

年制の大学でまで先生に訴える学生が多くなったそうだからです。また、昨年の夏頃にあった秋葉原の通り魔、無差別殺傷事件で現行犯逮捕された青森出身の青年もそうですね。小学生の頃は成績が良かったが、中学ではただの人になり、今の学校教育の中でだんだんと匿名的な存在になった。誰も自分のことを気付いてくれない、誰も自分の存在を大事だと思ってくれないという疎外感。競争社会での教育体制になって、学力差によって勉強ができない、それほどでもない子供は、自分の存在を誰も認知してくれないという悩みを抱えている。劣等感に苛まれている若者たちがすごく増えている。今の学校教育はそういう問題点を抱えている。大学に来てまで「先生が俺の名前を覚えてくれた」と喜ぶのは、何を意味しているのかというと、中学・高校と次第に年齢が上がるにつれ無名の存在となり、誰も自分の存在に重さを感じてくれない大人たちの中に、若者たちが否応なく投げ出されていく状況にあるからではないでしょうか。こういう点で私は、こういう地方の大学は素晴らしいと思います。自分の存在を先生方が分かってくれている。で、そういう世の中でやっぱり子供たちが、自分が生きていて頑張っている姿を「あ、この先生はちゃんと見ていてくれている」と相手に伝わるのが大切です。

ところが、家庭においては子供の存在を気づかなくなっている親が増えている。例えば、私のある講演会に来ていたお母さんは「先生、学芸大うちの子だめだったんですけど、来年やらせてみようと思います」「えっ、もう一回受けるのですか」「弟の方です」と言うのです。兄貴が駄目だったから弟が、という話を聞いた時に、親からしてみれば、長男が入れなかったら次男が入れば良いと思っている。いったい、どういう親なのでしょう。こういう能力主義の世の中になって、一人一人の存在は「生まれ来て価値があるよ、お前はいるだけでいい、お前がそこで生きていることが親にとって幸せだよ」というような、そういう無償の絆を深める関わり方が、もはや希薄になっている。

幼児教育というのは、そういうのを大切にする場所である。一人一人を大事にするという理念は、なかなか簡単には実現できない。もしも、しっかりこういう方法を採用すれば子供は「いつでも先生が自分のことを見ていてくれる。自分の存在を気づいていてくれる」というふうに信じてくれます。そうすると、子供の先生を見る眼差しが変わってきます。その時に、今の学校教育はどちらかということ、教えることに熱心ですけれども、遊びの中での先生は、実は子供にとってモデルなのです。徒競争なんかで先生が走ると子供は「きゃー」と叫んで喜ぶ。なぜかということ先生に憧れるからです。大人が憧れる存在である限りは、子供は大人の姿を見て成長します。幼児教育における保育者の役割は、大人がモデルになること。大人がかっこいいこと。「か

っかしい」とは見てくれではなくて、子供が心底から「先生、かっかしい。素敵だな」と思うこと。それは大人が一所懸命何かをやると、赤い糸がつながってさえいれば、子供は「先生はかっかしいな、先生みたいに頑張ろう」という気になるのです。そこに幼児教育の大事な眼目がある。つまり、教わるというよりも大人のやったことを見てまねようとさせるところに幼稚園の教師の役割があって、そういう信頼関係の糸がきちんと通ってれば、子供は先生のやることを見て頑張ろうと思う。そうするとお片付けでもなんでも、子供が先生のことを好きならば自主的にやってくれる。モデルになれるかどうか、幼稚園の先生の大事な役目であり、先生が「かっこよく」頑張っていると子供は「私やる、先生やる」というふうに言ってくれる。

こういった教育を実践することが小学校でも大事で、私の知っている姫路の某先生というのは、子供にとって憧れの的。某先生は障害児をとっても大事にする。すると、子供たち全員がその障害児の面倒をみようとし。お陰で、そこのクラスの障害児は、クラスの中でも非常な人気者になります。自分が疎外されているなどは全く感じない。明るいので、そのクラスで健常児と共に暮らしていきます。某先生の理念が子供たちに伝わっているのです。それで、クラス全員が某先生のようにになりたいと憧れます。

これは教育の本源であり、小学校においても必要不可欠な要素だと思いますけれども、教科教育がありますので、それだけでは済まない。しかし、生活教育が優先する幼稚園の場合には、このことがとても大事だというふうに私は思います。こういう子供と保育者との関係を私が見ていると、「あ、先生が子供に好かれている。先生はますます魅力的になる」と感じます。子供に尊敬され憧れの対象となる先生は素敵になります。素敵な存在となることが幼稚園の先生の本来の仕事だと思うので、子供とそういう関係を作ってもらくと、子供は必ず先生みたいに頑張ろうという気になります。言葉で叱る場合も、そういう関わり方をしてほしい。それが幼稚園の先生の望ましい姿であると、現場では常に感じています。皆さんもそういうところを目指して、保育者になることを夢見ていただきたいと思います。

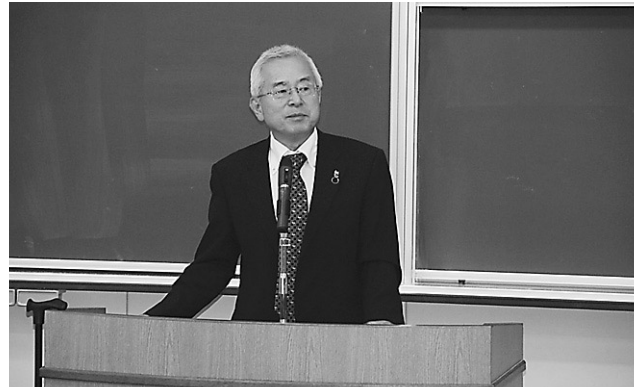
さて、時間となりましたので、失礼します。

福原

現場での事例を交え、誰にも分かるお話の仕方をしてくださいました。子供が「学ぶ」ということは「まねび」という語源からすると、先生という理想的なモデルが必要なのではないか。幼児が体で感じる「大事にされているんだ」ということの本質について丁寧にお話いただきました。

続きまして、金沢大学教授および教育方法学会の理事でいらっしやいます諸岡康哉先生にお話いただきたいと思います。諸岡先生は附属幼稚園の園長もお務めでした。

その後、松本陽子氏に質問や討論をしていただきますけれども、このお二人のコンビで園長先生、副園長先生を長くお務めだったと聞いております。そして現在は、附属中学校の校長先生をしていらっしやいます。諸岡先生は「金沢大学の競争相手に呼んでもらっちゃっていいの」と遠慮がちに言ってくださいました。「私どもはまだそんなレベルまで行っておりませんので」とお答えしたわけですが、今日のご快諾してくださった上、先ほどの小川先生のお話も踏まえて、分かりやすくお話させていただきます。



諸岡

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました諸岡と申します。よろしくお願ひします。少し体調を崩しておりました、お聞きづらいところがあるかもしれません。先ほど、しっかり聞くようにという注意がありましたが、どうぞ、無理しないで聞いてください。私、人前で話す時、大学の講義の時でもそうですが、一つだけ聞いている人にお願ひをしてから話を進めることにしています。そんなに難いお願ひではありません。おそらく、皆さんも教職を、幼稚園や小学校の先生になることを目指して学んでおられると思いますが、学校の先生は人前で喋るといふ機会がすごく多いと思います。私が、人前で一番喋りづらいのは、私の喋っていることがどういうふうに関手に届いているのかということが見えない、この時が一番不安で話しぶりです。だから、面白かったら笑ってください。面白くなかったら、面白くないという表情を返してほしい。小川先生のお話の後ですので、だいぶ緊張されて疲れもあるかと思ひます。どうぞ疲れてぼーっとしたら、ぼーっとしているぞということを表してほしい。あっちの方からお迎えがくれば目を閉じてほしいと思ひます。一番困るのは面白くなくても、真面目なスタイルであたかも聞いているかのような振りをされることです。特にこれだけは喋る、ということを用意しているわけではありませんので、皆さんの反応を見ながら、時には、テーマを変えたりすることもできますので、どうぞリラックスして聞いていただければと思ひます。

小川先生の後ということで、私も随分緊張しています。私が学生の頃、既に小川先生は、現在私が所属している日

本教育方法学会の理事をされておりました。言ってみれば、先ほど憧れの対象が要るということでしたが、私の憧れている研究者の一人が小川先生でした。その小川先生のお話を受けた後で、随分プレッシャーを感じております。

実は、先週も香川大学で学会がありまして小川先生を拝顔してやってきたばかりであります。声をかけようかなと思ったのですが、非常にお忙しい先生ですとどうとう声をかけることはできず、先ほどようやくお話ができたところではありますが、先生の次に私が与えられたテーマは、小学校の教師に焦点を絞ってお話をするところであります。

テーマをいただいた時には、学習指導要領・幼稚園教育要領の改訂を踏まえてという非常に堅苦しい副題も付いておりました。「対象は高校生ですよ」と聞いていましたので、高校生諸君に新しく改訂された学習指導要領のお話をして果たして面白く聞いてもらえるだろうかと随分悩みました。それで、このテーマを一切忘れることにしました。むしろ、それよりも私がどうして教育学、私は教育方法学という分野を専攻しているのかですが、どうしてこういう分野を学生時代に選んだのか、についてお話することにしました。

振り返りますと、先ほどのお話を伺っておりましたら、こども学科の3年生・2年生の方々もいるということですが、私が進路を教師と決めたのも、大学3年生の時でした。教育学の中にたくさんの分野がありましたが、教育方法学という、最も教育実践に近い分野を選びました。いくつかの動機があったのですが、その中の一つにある一冊の本がありました。その本は兵庫県の小学校の先生が自分の実践をまとめて出版された本でありました。持って来ました。『教育実践記録選集』という本は、私が大学3年生の時にちょうど出版されました。五巻本で日本の学校の先生方が自分の教育実践をそれぞれ書かれて、それが五冊の本に分冊になって出版されておりました。私、広島大学に行っておりましたが、大学での講義というのは本当に面白くありませんでした。私も今はその一翼を担っていますが、非常に理屈っぽいと言いますか、ペスタロッチがどこで生まれて小便をしたような話をされました。果たして、そういう受け売りが日本の教育実践を切り開いていく理論として活かせるのだろうか非常に疑いを持って悩んでおりました。そんな折出版され始めたのが、この『教育実践記録選集』でありました。その中でも最も私が関心を持って読んだのは、小西健二郎という兵庫県の氷上郡、兵庫県の真ん中辺でしょうか、京都府との県境にある郡部の小学校で先生をされている小西健二郎という先生の本『学級革命』という実践記録でした。それがこの第3巻で収録されておりました。それを読み始めたら非常に面白くて、小学校の教育ってこういう可能性があるのだ、学校の先生ってこう

いう思いで子供に接しているのだということが手に取るように分かる本でありました。その中に、子供のたくさんの作文が紹介され、小西先生がどういうふう子供と接しているのかも書かれていました。もちろん、方言そのもので書かれていました。ところが、方言というものは非常に分かりにくいですね。標準語というか、共通語に直さないと分からないのですが、読んでいくと私の喋っている言葉と同じでありました。後で分かったのですが、兵庫県の氷上郡は京都府の県境にあり、隣町が私の出身地でありました。私は京都府の生まれであります、京都の郡部なので、京都市内へ通勤するには、汽車で一時間ほどかかる所でした。

その後、私の故郷を一山越えた兵庫県で教育実践されていたのが、この小西健二郎先生だったことを、巻末の解説を読んで知りました。「だから、子供たちの発言と先生の言葉がよく分かるんだな」と納得しました。

それで、この『学級革命』という小西先生の教育実践はどのような実践だったのかということですが、これは田舎の小学校、一学年一学級しかない、そういう小さな学校で小西先生は教員をされていたわけです。1年生の時にそのクラスを担当し、再び5年、6年と二年間この学校で同じ子供を担当するという。そして、この実践記録は先生が担任されると必ず出しておられた文集、この当時、小学校5年と6年のクラスを担当されていた時に出しておられた文集は「たけのこ」という、あの辺は竹の子がよく採れるのですが、「たけのこの兄」というユニークな名前をつけた文集を5年と6年のクラスで出しておられる。その文集に載った子供の作文をベースにしながら『学級革命』という実践記録は書かれている。まあ、『学級革命』という題から予想がつくように、実は、この小学校は1年から6年までクラス替えがありませんので、往々にしてそういうクラスは人間関係が固定するものです。それで、小西先生が1年の時には担任をしていたのですが、5年でその子供たちと再会し、再びいいクラスを作ろうという意気込みをもって担任となったのです。

その小学校5年がいよいよ終わろうとする三学期の1月の末に、このクラスにいる勝郎という男の子が、放課後、小西先生が一人で教室にいます、「先生、僕の書いた作文を読んでください」と言って作文をもってきました。小西先生は「後で読むからね」と返事し、子供たちが帰った後、その作文を読みると、この勝郎君が「このクラスでは小学校1年生からボスがいて、ずっと僕はいじめられてきた」と記されていました。あの当時は「いじめ」という言い方をしておりませんでした、ともかく、自分のクラスにいる清一という男の子がボスで、クラスの全員が清一君の言いなりになっている。この中でも、特に僕が睨まれていて、小学校1年生から5年生までこういうことがあったと

いう事実を赤裸々に書いた作文でありました。

小西先生は子供たちが帰った後、教室でその作文を読んで非常にショックを受けます。自分としては、非常にいいクラスを作ってきた、そういう自負があったのですけれども、先生の前で見せる表情と実際の子供の実態とは違う、そのことに非常に大きなショックを受けました。

この勝郎君は、その作文の最後ではこういうふう言葉に結んでいました。「先生、ぼくはがんばってこの日記を書いたのです。みんなの前で読ませてください。かなんけれども、力をふりしぼって読みます。細見勝郎」という言葉で閉じられていました。

小西先生は翌日一番に勝郎君に話をし、「先生、今まで全然気づかなかった、悪かった」と、まず勝郎君に謝って、「けど勝郎君、この作文、皆の前で読めるか」と尋ねますと、一日が経ってからですが、勝郎君はすごく怯えて、「やっぱり読めない」というふうに答えました。

この小西先生のクラスの中にボスがいて、子供の関係が支配する者とされる者の関係になっているわけですから、それを何とか対等な、お互い平等な関係になる、そういう学級にしていこうという取り組みがそこから始まります。

小西先生はいろいろな取り組みをします。社会科の時間に人権について学習し、「人を差別するのはよくない」とか、「人には一人一人権利がある」とか、あるいは子供の作文を読んで自分が思っていることや意見をきちっと言うこと、正しいことをきちっと言うことは良いことだというふうに、いろいろな場面を捉えては子供たちに、人を差別したり、いじめたりすることは良くないと諭し、一方では、勝郎君を励まし続けました。

しかし、なかなか勝郎君やクラスの子供たちは清一君を批判することができませんでした。6年生になった2学期10月11日のことですが、学級会で初めて勝郎君が名指しで、「遊びの時にルールを破ってずるをした」と清一君の批判をしました。その部分は『学級革命』の中で、こういうふうに小西先生は書いています。「勝郎は『ぼくらは今までに悪いと気がついたら、みんなにあやまりました。清一君も、今までのことを考えて、悪いと思ったらあやまってください』と静かにに発言した。今までの話し合いの様子をじっと下を向いて聞いていた清一が立ち上がり、『みんなが言ったように、ぼくは今まで何回もずるいことや勝手なことをしました。これからはもうしませんから、こらえてください』と言い終わって机の上に泣き伏した。私自身感涙してしまって、体がジーンとする思いであった。しばらく皆もジーンとして、もの一つ言わなかった。ただ、清一のすすり泣く声だけが聞こえた。その時の子供たちは、厳粛という形容がぴったりとあてはまるような顔をして、身動き一つせず、じっとしていた」。そういうふう書いています。

この時の話し合いがきっかけになって、このクラスの子供たちの関係は一変します。

今までは、清一君だけが敬称というか「さん」付けで呼ばれていましたが、皆お互い敬称なしで呼び合うクラス関係になるということが象徴しているわけですが、そして勝郎君はやがて中学校へ進みますが、その自分たちが住んでいる部落でも二年上の上級生がやっぱり威張っていて、他の下級生の中学生は皆、言いなりになっている。そういう部落だったのですが、勝郎君が中学生になった時、今度は、部落のボスを皆でやつつけるということもするとこの本には書いてあります。この実践記録を読みながら、そう言えば、自分のいた小学校のクラスにもボスがいたなと思い出しましたが、最後に、ある人が書いた解説を読んでいて、非常に衝撃を受けました。それは、『学級革命』の成立とその内容ということで、小西先生の実践の特徴とか、どういうふうにしてその実践が生まれたかということ解説していました。その中に、小西先生は、いろいろな全国の先生方と交流をして、学級文集をお互いに交換して遠くの人とも学び合っていたそうですが、そこには次のような人名が並んでいました。「また氷上郡と山一つ隔てた京都の小西健二郎、江辺文夫、山下隆、古牧進、松下進一らとは一層連帯を強めながら、生活綴り方の仕事に打ち込んでいくのである」というふうにかかれた箇所を読んだ時に驚きました。この二番目に書かれている「江辺文夫」という人が実は、私が小学校5年6年時の担任でありました。私は大学3年生になって初めて、当時担任をしてもらった江辺先生が、この『学級革命』の実践をされた小西先生の仲間であったことを知りました。そしてそういえば、小西先生の『学級革命』とよく似た取り組みをされていたということが思い出されました。

それから随分時代を経て、実はその江辺先生、その後、最後の校長職をお辞めになって、長い間の教員経験を一冊の本にまとめて自費出版されました。私にも、ぜひ読んでほしいということで送られてきました。それがこの本です。この私の恩師である江辺先生は昨年亡くなられましたが、『たんばの子らと四十年』という表題で四十年間の自分の小学校での実践を一冊の本にまとめておられました。実は、この中に私の名前も実名で出てきます。驚きましたけれども、あの当時は、子供の実名表記がありました。今はもう実践記録は実名で書くことができない世の中になりました。

実名の例をもう少し紹介しましょう。私が小学校5年6年時に担任してもらったクラスのことを江辺先生は、次のように本の中で書いておられます。「私にとって、このクラスは、忘れようにも忘れられない強烈な印象があります。その小学校へ昭和31年の春に転動して、5年6年を担当し

て卒業させた。二度目に担任したのが、この子供たちなのです。入学してから私で担任は九人目という。肝心の4年5年という時に担任のお産、病気交代、転任などで一年に何回も担任が交替していた。このことから、学級の内容もおよそ想像がつくと思います。私も40年間にこんな学級は一度だけです。6年生というのに、一年が終わる間際になっても授業らしい授業はできず、授業中も勝手に席は立つ、口論をする、消しゴムの貸し借りは投げ合いです、弱者いじめは日常茶飯事といった状態でした。しかし、荒れてはいたけれども、一人一人を見てみると根はとてもいい子ばかりでした。2学期になって何とか落ち着いて来、12月に一種の『学級革命』のようなことも経験して、それからはぐんとまとまりもついて、どうにか3月には無事卒業していってくれました。

そして、この12月に一種の『学級革命』みたいなことを経験したということも、よく記憶に残っています。私は、3月生まれですので、小学校の頃だと3月生まれの子と4月生まれの子では、ほぼ一年の差がありますね。ですから、クラスでは前から一、二を争うくらい背が小さかった。体力もそんなにありませんでした。しかし、真面目な子供でしたので、だいたい学級代表とかに選ばれた。あの時は本当に辛い二年間でした。私は学級の代表でしたが、全くの傀儡政権でありました。江辺先生がいる時には皆言うことを聞くのですが、先生がいなくなると途端に駄目でした。先生はこういうことをクラスの皆にやらせるようにと、私と女子の代表のキリノ・ミヤコさんと呼んで課題を伝えるわけです。「それじゃあ、先生がいらない3限目はこの課題をしましょう」と仲間と言うのですが、従ってくれません。クラスの中にいた一番体のでかい、彼はその後ラグビーの選手になりましたが、マダ君というのが陰のボスでありました。「言うこと聞かんで、みんな遊びに行こうぜ」と仲間を誘い、グラウンドへ出て行く。教室に残って真面目に課題をやったのは私とキリノ・ミヤコさん二人だけという、辛い小学生時代でした。

そして、一種の『学級革命』と江辺先生は書いていますが、マダ君とタイムンで勝負したいということを私が言った。彼がいつも邪魔をするものですから、それでそういう勝負をしたことはあります。やはり、ちょっと怪我もしたので、江辺先生から親に対して「こういうことがあった。ちょっと怪我をして帰りますけれども」と連絡があったのはその事件のことだと思います。『学級革命』というのは、こういう経緯があってこのクラスは改善され、卒業の頃は良いクラスになったという記録です。江辺先生も実は、クラスのボス退治の実践に取り組んでいたのです。

さて、小西健二郎の『学級革命』という本は、全国の小学校教員の非常に共感を呼び、たくさん売れたそうです。

そして、ある人が「日本の小学校のクラスにこれだけボスがいるとは」と感嘆したくらい、ボス退治の実践が流行しました。同時に、学級づくりとか集団づくりの実践が『学級革命』の実践を契機にして全国的に広がっていきました。

私は、このような個人的なつながりもあったので、その後も日本の教師たちが綿々と書き綴ってきた、いろいろな教育実践の記録を読みました。その実践記録を読む過程で、学校の教育の深みや素晴らしさ、教師という職業の素晴らしさを実感していきました。

日本はおそらく、世界的にも珍しいぐらいに教師たちが自分の教育実践を克明に記録し、それを皆の前で報告したり、保管したりして、教師自身が学び合っていくという伝統をもつ国ではないかな、ということに思い至りました。そして、私もいつの間にかそういう教育実践を対象にして学級集団を研究していく道を選ぶようになっていました。

10月に入り読書の秋ですが、ぜひ皆さんもこういった私たちの先輩が書き綴ってきた実践を読んでいただければと思います。日本には実に夥しい実践記録が残っています。

こういう実践記録に最初に先鞭を付けたのはおそらく、あの当時、山形県の山元村中学校という所で中学校の教師をしていた無着成恭という人の書いた『山びこ学校』です。

新聞記事を読んでいたなら、無着先生が実践を行った山元村中学校は、今年の4月から廃校になったそうです。この『山びこ学校』は非常に有名になりました。先に紹介した『学級革命』もそうですが、あるいはその小西先生と同じ兵庫県で小学校の教師をしていた東井義雄という先生が書かれた『村を育てる学力』も非常に有名になりました。こういう実践記録を日本の教師たちはお互い読んで学んでいく、手弁当でいろんな学校へ行ってその実践とか授業を見たり、お互い自分の作った文集を交換したりしながら、教師としての技量を高めてきたことが分かります。その後、江辺先生と何回かお会いしましたが、あの頃の話をする、「僕も、いろいろな全国の先生と文集の交換をしていた」「じゃ先生、あの山形県の山元村中学校の無着先生とも交流があったのですか」と聞くと、「ああ、無着君の『機関車』（『山びこ学校』の下敷きになった中学生の書いたもの）は全部持ってるよ。よかったらあげるよ」と言われたのですが、あれを貰っていたら相当な値打ち本になったことでしょう。こんな具合に全国の先生方は郵便料金が安かったので、いろんな人と交流ができたのだとおっしゃっていました。日本の郵便制度は非常に優れ、どこへ送っても同じ値段で送れますね、僻地でも。若い皆さんには、古い化石のような実践なのかもしれませんが、この伝統は現在でもなお、形を変えて脈々と続いていると思います。例えば、皆さんよくご存知の「ヤンキー先生」こと、北海道の余市高校で実践をした義家弘介さん。今は参議院議員に

なっていました。また、金沢にも来られて講演をされた有名な「夜回り先生」こと、水谷修さんなど。自分が取り組んだ実践記録を出版して、読者からいろいろと批判もしてもらって学び合うという伝統が残っています。

学生時代には、実践そのものを見ることも大切ですが、ぜひ実践記録も読んでみてください。その先生の思いとか、どういう意図でそういう働きかけをしたのが手に取るように分かりますので、ぜひとも読んでほしいと思います。

他にも日本では、教育とか学校とか教師をテーマにした実に夥しい小説が出版されています。これも日本の近代小説の一つの特徴ではないかなと思いますが、古くは夏目漱石の『坊ちゃん』。旧制松山中学校の数学教師が主人公ですが、実際、夏目漱石は松山中学校へ英語の教師として赴任しています。その時の経験を下敷きにして書きました。

島崎藤村の『破戒』。これは部落差別をテーマにした自然主義文学の小説ですが、主人公の瀬川丑松は、被差別部落出身を隠す小学校の訓導（戦前の教員の呼び名）でした。

戦後になってこれが一番有名かなと思いますが、壺井栄の『二十四の瞳』。この前、小川先生と香川県へ行きましたが、瀬戸内海の小豆島が『二十四の瞳』の舞台となっています。その島の分教場に赴任した大石久子訓導という女の先生が主人公です。これは何度も映画化されています。

また、石川達三の『人間の壁』という作品もあります。かなり長編で、朝日新聞に何年かにわたり連載されました。これは佐賀県の女教師・尾崎ふみ子を主人公にして、学校と組合の間で葛藤する姿を描いています。この小説には、金沢のことが出てくる章があります。確か「雪の街で」という章だったと思います。そこで実際、味噌蔵小学校でこういう発表があったとかもすべて書かれている小説です。

更に有名なのは、やはり灰谷健次郎の『兎の眼』ではないかと思います。小学校ではよく、夏休み読書感想文の課題図書に指定されたりして多くの人が読んでいますが、『兎の眼』というのは小谷美美という女の先生が主人公で、小学校1年のクラスの一年をモデルにしています。一言も喋らない鉄三君という男の子が、次第に小谷先生に心を開いていくという交流の様子が描かれた小説です。これは、灰谷先生ご自身が長い間、神戸で小学校の教師をしていらっしやっただけで、そういう体験がこの小説に反映しているのかなと思います。

灰谷先生の『兎の眼』が出てから、ずいぶん時間が経ちました。最近、私が読んでいた小説は、若手の小説家で、テレビでもよく顔を見かける石田衣良の『5年3組リョウタ組』です。東京新聞で連載されていましたが、単行本になって出版されました。5年3組のリョウタという名前の男の先生が主人公。そのクラスでいろいろな事件が起きる。それをテーマにした小説です。

実践記録よりもこういった小説はさすがプロですので、文章も非常に上手ですし、読ませてくれるという内容です。

ごく最近読んだ小説は、湊かなえの『告白』です。2009年の本屋大賞（新刊書の書店で働く書店員が過去一年間、書店員自身が自分で読んで「面白かった」「お客様にも薦めたい」「自分の店で売りたい」と思った本を選び投票でトップを決める）を受けました。推理小説的な構成で、ある中学の女子生徒が校内で死亡した事件をテーマにしています。

このように、日本では実に夥しい数の小説が、教育とか学校とか教師をモデルにして描かれている。更に小説からテレビドラマや映画になったりしています。先ほど挙げた小説のほとんどが映画化されています。

テレビドラマだと、武田鉄矢が主演した「金八先生」や、米倉涼子が主演した「モンスターペアレント」などがあります。テレビドラマで視聴率が取れない場合、教育とか学校とか教師をテーマにせよ、というのがテレビ業界の定説だそうです。それだけ日本は、学校教育に国民の関心があるのでしょうか。これは、おそらく近世の寺子屋以来の特徴でしょうし、江戸は当時のパリとかロンドンと並んで識字率が圧倒的に高い都市でした。だから、江戸時代に貸本業が成立した。そういう本好きの国民性を現代まで継承しているわけです。

しかし、いま日本の教育は少し批判的といいますか、「活字離れ」「学力低下」に直面し、今回の学習指導要領改訂の目玉の一つも「学力回復」です。従って、授業実数は増えました。教科書の内容も高度になっています。その背景には国際的な学力調査の結果が反映しているわけで、皆さんもどこかでお聞きになったかと思うのですが、PISAの国際調査、あるいはTIMSSの調査。PISAの場合はOECDに加盟している国を中心として、15歳の子供を対象にした学力調査。TIMSSの方は小学校4年と中学校2年、教科は理科と数学に限定しています。その結果が両方とも12月頃に公開されますが、日本の文教政策に大きな影響を与えます。特にPISAの調査が有名ですが、2000年から三年おきに行われました。結果が報告される度に、日本の順位は落ちている。だから、国際的に負けるなということで、今回の学習指導要領の改訂もその影響を受けている。学校の教師に頑張れというエールを送っていますが、私はもう教師はこれ以上頑張れないのでは、今までも頑張りが過ぎてきたと思っています。実は、こういう調査を見ていると、国際的な比較ができますので、これは学習環境調査も同時にやっています、それを見ますと、例えば、日本の子供たちは、学校外での学習時間が塾に行っている時間を含めても非常に少ない。学校外での学習時間が非常に少ないという特徴が一つ。その代わりに、テレビの視聴率は世界でト

ップです。学校を終えてから自分で勉強する時間は本当に下の方です。年々減ってきております。二つ目に、学習意欲を失っている。特に理科とか数学は嫌いで、理系離れの子供が増えている。嫌々勉強している。これが二つ目の特徴。三つ目には、9月に報道されたので、皆さんもご承知かもしれませんが、日本の教育予算は、非常に少ない。学校に投入される予算は、最近の調査によれば、とうとう世界で最下位になりました。前は世界でビリから二番目ぐらいだったのですが、一番ビリはギリシャだったですかね。日本はそれよりも今回は下だった。

つまり、学校以外での学習時間は少なくなって、やる気がなくなって、予算も少なくなった。なのに、PISAの調査やTIMSSの調査では結構、まだ上位にいる。特に一億人規模の国だと日本はトップです。それは何を意味しているか。いまだこれだけの学力を保持しているのは、日本の教師の力が優れているからという一言に尽きます。この点は、誇ってもよいと思います。ぜひ皆さんに、この日本の教師の仲間に入ってほしいなと思います。もちろん、教師になるための大いなる努力は必要です。

福原

振り返りますと、芸術教育運動や綴り方教育が一時期は本当に力を持っていたわけですが、しかし、何故に軍国主義を阻止できなかったという問題も大きく残っているのではないかという話し合いをしたことがございます。皆さん方はまず、今ほどのお話の中で紹介された様々な本をこの機会に一念発起して読んでみる。苦しくても途中で投げ出さずに読破するという事に挑戦するところから始められては如何でしょうか。

私どもは、教育学で大先輩の金沢大学さんに一歩でも近づこうと思って「教師になるためノート」などを参考にさせていただき、こども学科の学生たちに叱咤激励、鉛と鞭で迫っています。皆さん方におかれては、今日のお二人のお話から、改めて教師という職業の素晴らしさ、魅力や今日的課題を認識されたのではないかと思います。

Ⅱ部【シンポジウム・指定討論】



福原

本学こども学科にはスタッフとして、幼稚園や小学校での現場経験、更に教育委員会という行政面での実務経験が豊富なベテラン教員がいます。時間が限られていますので、まず、本学教員の松本・村井・岡部、3名の教員からそれぞれの視点でコメントをしまして、その後、小川先生と諸岡先生の方からコメントを頂戴したいと思います。

松本

私は、大学卒業後、3年間は小学校に勤務しましたが、後の34年間は幼稚園で人生の半分以上を過ごし、子供と一緒に過ごす素晴らしさを肌で実感してきました。幼稚園の先生は、子供の様子を常に注意深く観察し、小児科のお医者さんなみに、例えば、子供が朝、登園した時の表情一つで、体調を把握できるようにならなければなりません。

たくさんの子供、いろいろな個性がお遊戯やお絵描きなど、同じ場所で同じ時間を過ごすわけですが、やはり幼いので、健康と安全は大人である先生がきちんと管理する責任があるのです。「子供が好き」なことはもちろんですが、「子供の命を守る」という責任の重さも自覚してもらいたいと思います。

村井

国語・算数・理科・社会・生活・音楽・図工・家庭・保健、やがて英語が必修化になりますが、全教科を教えることは、指導案作成や教材準備を含め、あれやこれやと、とても大変ですが、とても楽しいです。

小学校の一年間は、平常の時間割と季節の行事によって構成されています。基本は毎日、定められた時間割に従って各教科の授業をし、児童の学習指導をすることです。他に、学級会や特別活動の時間も 있습니다。また、季節の行事、代表的なものには、入学式・運動会・プール・写生大会・社会見学・遠足・卒業式等がありますが、その企画や運営もとても大変です。だけど、楽しい。毎日がとても忙しいけれども、とても楽しい。児童と一緒に勉強したり運動したり、泣いたり笑ったり、たまに怒ったりして過ご

しているうちに、一年間があつという間に終わってしまう。それが小学校という所です。

岡部

「夢は見るものではなく、叶えるものである」というスローガンを掲げ、人間力の養成、具体的には、「地域で活躍し、地域を創造したい人」「人間を探究し、無限の可能性を発見したい人」「自分で考え、行動できる人」「豊かな感性と発想を持つ人」「心と身体で自己表現できる人」の育成を使命としています。段階的に学年進行で身に付けてもらいたいスキルは、1年が「基礎教養」、2年が「人間関係力」、3年が「企画力」、4年が「知の再構成と統合」といったところです。

教員採用試験では、金沢大学は強力なライバルなので、正規の授業だけではなく、別にCDP（キャリア・デベロップメント・プログラム）コースを設けて試験対策用の特訓をやっています。教師は素晴らしい職業であることは間違いありませんが、まず、採用試験に合格しなければ、夢を叶えることはできませんので、燃えています。寝る間も惜しんで頑張っています。

また、人間科学部では、2年・3年でフィールド演習を実施します。担当教員がそれぞれのテーマで学生を募集しますが、こども学科では、放課後児童クラブや小学校でのサマースクール補助体験、保育所における保育体験など、地域社会と連携し、様々な職場のスタッフと交流しながら、

子供の成長と発達に関する今日的な課題を見つけ、人間力を養成する演習です。

福原

それでは、講師のお二人からコメントを頂戴したいと思います。よろしくお願いします。

小川

先ほど「地域社会と連携し」と言われましたが、適正な規模の都市、豊かな自然と文化に恵まれ、伝統と現代がほどよく混ざり合った金沢市の地域性は、メガロポリスとなった東京、物と情報が溢れる東京にはない良さ、素朴さだと思います。その点を大切にして、地域に根ざした教育を実践されることは、とても意義あることだと思います。

諸岡

先ほど「金沢大学はライバル」と言われましたが、私は敵対関係ではなく、ぜひ建設的な協同関係を構築したい。同じ教師として、あるいは教師を目指す仲間として、金沢大学と星稜大学の教員同士・学生同士が、座学（理論）と現場（実践）、具体と抽象を往復し、お互いに学び合い、刺激を与えられる関係となって発展していくことが、結局、地域貢献につながると確信しています。

福原

皆さん、本日はお陰様でとても有意義な会を催すことができました。改めて厚く御礼申し上げます。

ご清聴、有り難うございました。